

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第111号

令和2年6月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

楠正勝、“河内の國四條の里に居宿”の記述

## 尺八の起源を説く 18世紀の作「虚鐸傳記」

＝ 楠正儀の子、正勝 驚きの“虚無僧の祖”説 ＝

### ● 正勝は虚無僧の元祖 ●

楠正成の子で、正行の弟、正儀の子に正勝という人物がいる。この楠正勝が虚無（こむ）僧の祖、いわゆる虚無僧の始まりとの伝承があるとのこと。

早速、虚無僧・楠正勝とキーワードをパソコンに打ち込むと、奈良県十津川村ホームページの「楠正勝の墓」がヒットした。そして、そこには正勝の墓の写真とともに以下の解説が載っている。

一 楠正勝は、南朝の忠臣楠木正成公の孫で、虚無僧（こむそう）の元祖ともいわれています。金剛山千早城落城後、弟の正元と共に来郷（十津川村のこと）、武蔵（地区名）において再挙を図りましたが病に倒れ、この地に葬られたといわれています。明治時代、郷人達が境内を整備し、追悼祭が行われた武蔵では、毎年4月3日に祭典を営み、その霊を弔っています。武蔵にある楠正勝の墓所は、村の有形文化財です。

また、正勝が虚無僧ゆかりということから、平成元年には虚無僧研究会主催による墓前供養尺八献奏大会が行われ、60人の奏者による尺八の演奏が行われたと云う。



### ● 虚鐸傳記に「虚無僧の祖正勝」の記述 ●

そして、この尺八の起源を説く18世紀末の作品、「虚鐸傳記」（国立国会図書館デジタルコレクション）の一説に、「虚無僧の祖楠正勝」の文字を発見した。

この件は約4000字あるが、その骨子（扇谷略解）は以下の通り。

この件は約4000字あるが、その骨子（扇谷略解）は以下の通り。

#### 「虚無僧の祖楠正勝」 件の骨子

楠正勝のことを詳しく記した書が、江州志賀郡山上村から出てきた。

それによると、正

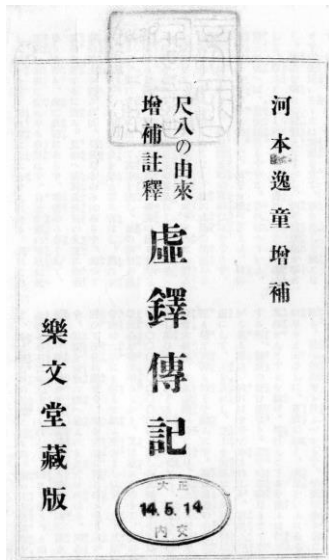
勝は正儀の末子である。

正儀死後、南北朝合一し、楠氏一族はところどころに蟄居した頃、正勝はようやく成長・元服し、楠三郎兵衛正勝と自称した。

正勝が龍田明神に参った帰り、八木という地で、一人の老翁と出会う。

老翁曰く、「私は正成公の竹馬の友で、今年80歳を超えた。天皇をないがしろにした北条家は亡び、主上は一天四海を復したが、天下は武家に随い王家には復さなかった。正成公、正行公は功を一時

に開き、忠義を金石に等しうし、正成公が摂河泉を領された頃、我にも“共に君に仕えよう”と勧められたが、私は、私にその功なくその任にも非ず、と辞した。今は、南北一統して幕府が政を行っている。そなたは、今、その功用を施す相手もなければ、そなたが楠氏の末裔である



をもって幕府が罰することもあるまい。私との出会いを天命と思い、世俗の生活から身を引いて、僧侶となって気ままに全国行脚し、一生を終えてはいかかか。」と。

この時、正勝は老翁の言に感服しながらも、その場を去った。が、行く末のことを思い続けるうち、再び老翁を訪ねた。

正勝を見た老翁は、打ち笑い、曰く、「我つらつら世のありさまを察するに、後醍醐天皇は越王勾踐に類し、万里小路藤房は文種に比し、正成は范蠡(はんれい)に比す。が、その終わりを見ると、正成は文種の義を為し、藤房は范蠡が五胡を退いた如く遁世し禅門に入ったと聞く。等しく賢才雄武にして、当代の人傑はただこの二人あるのみである。

他に優れたものもいるにはいるが、誰もみな碌々(平凡でとるに足りない)として是非にも及ばない。

このような状況では、この後2~300年は戦いがやみ、天下が収まることはなからう。

よく考えるが良い。

志賀の里に私の弟子、虚風という開山の僧がいる。虚鐸(きょたく：竹の縦笛)も堪能・会得している。そなたは虚風の下に往き、学び、心を虚無にしながら。そして、今日よりは、別號を虚無と称するとよい。」と、一卷の書を与えた。

正勝は喜び家に戻り、この書を読むと、見え隠れしていたことが自在に分かるようになり、天を覆っていた雲霞が晴れ渡ったので、直ちに旅装束をして志賀の地へ急ぐことにした。

そして正勝は、龍田に立ち寄り、老翁にいとまごいと思ったが、老翁はすでにどこかに旅立ち会えなかった。しかし生あるを知り喜び、龍田から山を越え、河内の國四條の里(扇谷：四條畷のことか)に泊まり、浪速、伏見、木幡、醍醐、逢坂山と足を

運び、そして近江の国志賀に至った。

### ● 正勝は虚無僧姿で行脚したのか ●

楠正勝は、虚鐸伝記に記されているように、南朝崩壊後に世を儚んで出家した普化宗高僧の虚無である、という伝説がある。

ブリタニカ国際大百科事典には、普化宗とは、「中国、唐の禅僧、普化を祖とする宗派。普化禅宗ともいう。建長1(1249)年に宋に渡った心地覚心が日本に伝えた。その孫弟子金先は北条経時の帰依を受けて、下総小金に一月寺を創建し、普化宗の本寺とした。典拠とする経典はなく、尺八による虚無吹奏を禅の至境とした。虚無宗(こむしゅう)はこの系統である。」と記している。

楠一族が、足利幕府からの弾圧・攻撃を回避して全国に落ちていったという話と、編み笠をかぶり、顔を隠して虚無僧姿で行脚する僧が世をはばかる姿とを重ね合わせた伝承なのか。

それにしても、楠一族は様々な分野・形で伝承を残し、後世の人々に少なからず大きな影響を与えたことが、この正勝虚無僧説からもうかがい知ることができる。



pixta.jp - 1935576

### ● 正勝、曹洞宗の僧・傑堂能勝説も ●

井之元春義著「楠木氏三代」は、楠正勝を取り上げ、正儀の長子であることは違いないが、生没年代からして不祥であるとし、一説に、正勝は1379年に出家し、曹洞宗の僧、傑堂能勝その人であるとも記している。

同書は正成以降の系図を載せ、正儀の長子、正勝は小太郎、二子正元は二郎、三子正秀は次郎左衛門・左馬頭としているが、大日本人名辞書は、正勝は次郎左衛門と称し左馬頭に任ぜらる、とある。

明らかに正勝と正秀の混同と思われるが、井之元春義自身が、正勝は“弟の正秀の事績と混同されて伝えられていることが多い”と記し、いずれにしても不明の箇所が多すぎると結んでいる。

(1 面写真:楠正勝の墓/奈良県観光公式サイト・なら旅ネットからの転載)

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)